

平成 29 年度第 1 回グローバル教育推進委員会 会議録

1 開会及び閉会に関する事項

開会 平成 29 年 7 月 10 日 (月) 9 : 30
閉会 // 11 : 30

2 場所

高知共済会館 3 階会議室「藤」

3 出席委員の氏名

神奈川県立国際言語文化アカデミア 教授 江原 美明
 楽天株式会社 新サービス開発カンパニー
 教育事業プロジェクト推進課 シニアマネージャー 葛城 崇
 国際バカロレア日本大使、
 東京インターナショナルスクール 理事長 坪谷 ニュウエル 郁子
 高知県公立大学法人高知工科大学 教授 長崎 政浩
 高知県教育委員会事務局 教育次長 藤中 雄輔
 国立大学法人大阪大学人間科学研究科 教授 山本 ベバリー アン

4 高知県教育委員会事務局の出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局 高等学校課課長 高岸 憲二
 // 高等学校課課長補佐 藤田 優子
 // 高等学校課再編振興担当チーフ 池上 淑子
 // 高等学校課指導主事 清水 宏志

5 内容

【開会】

事務局	<p>それでは定刻になりましたので、ただ今から平成 29 年度第 1 回グローバル教育推進委員会を開催いたします。私は本日の進行役を務めます高知県教育委員会事務局高等学校課 再編振興室チーフでございます。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>開会にあたりまして、高知県教育委員会事務局教育次長がご挨拶いたします。</p>
教育次長	<p>皆さん、おはようございます。教育次長でございます。皆様方とは何年来のお付き合いとなりましょうか。平成 26 年度の 10 月に再編振興基本計画が策定されてから、グローバル教育推進委員会を立ち上げ、高知県のグローバル教育のこれからの方向性を、特に高知南中高等学校と高知西高等学校の統合という計画を機会に、大きくいろいろな形でグローバル教育を進めていくという時に、皆様方のご意見をいただきながら進めさせていただいています。会議を開かせていただいて、4 年目ということになります。</p> <p>いよいよ、その統合校につきましては平成 30 年度の 4 月から中学校が開校します。そういった意味で、まさにこの 1 年間は具体的なものの積み上げ、最終段階に入っているのではないかと考えております。そして平成 30 年の 4 月の高知国際中学校あるいは高知南中学校の 1 年生が入学してくる、そこからの 6 年間というのが、まさにこのグローバル教育推進会で議論された内容を具体的に実践する場になっていくのではないかと考えております。</p>

	<p>本日は平成 29 年度第 1 回目でございます。計 3 回開催させていただいて、途中では各学校の実践的な取り組みの内容についても発表していただきながら、そして、また 10 月には第 2 回、2 月には第 3 回ということで、まさに平成 30 年の 4 月という目の前の段階でのご意見等をいただきながら進めていきたいと思っております。ぜひよろしくお願いいたします。</p> <p>お手元の次第にもありますように、今年度のテーマとしては「主体的な学びや協働的な学びをとおしての学習の在り方について」ということで、まさに今日取り上げさせていただきます協調学習、探究型学習、英語教育プログラム、そして IB 教育、そういったものがすべてここに入ってくるのではないかと思っております。新しい学習指導要領も交付される時期でもございます。内容をしっかりと各学校、謙虚に受け止めながら、またご意見もいただきながら進めていきたいと思っております。本日はよろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>それでは、本日は外部より 5 名の委員の皆様にご出席いただいておりますので、ご出席の皆様を紹介させていただきます。神奈川県立国際言語文化アカデミア教授 江原美明委員。</p>
委員	<p>よろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>楽天株式会社新サービス開発カンパニー教育事業プロジェクト推進課 シニアマネージャー 葛城崇委員。</p>
委員	<p>よろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>国際バカロレア日本大使 坪谷ニューエル郁子委員。</p>
委員	<p>おはようございます。よろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>高知工科大学教授 長崎政浩委員。</p>
委員	<p>おはようございます。よろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>大阪大学人間科学研究科教授 山本ベバリーアン委員。</p>
委員	<p>よろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>なお、石筒覚委員は所用のため、ご欠席との連絡をいただいておりますので申し伝えます。</p> <p>続いて、本日の資料を確認させていただきます。「次第」、「出席者名簿」、「平成 29 年度グローバル教育推進委員会について」、「設置要綱」、「座席表」、「資料 1」～「資料 3」まででございます。よろしいでしょうか。</p> <p>次に、設置要綱をご覧ください。本グローバル教育推進委員会は教育次長を座長とすることとしておりますので、座長をお願いし、これからの進行は座長にお譲りしたいと思います。よろしくお願いいたします。</p>

【高知南中学校・高等学校における取組について】

グローバル教育プログラムについて説明・協議

・英語教育 ・探究型学習

座長	<p>昨年度の本会議では、授業者も生徒も学習の振り返りがキーワードで進めてまいりました。本年度は平成 30 年度開校をイメージしまして、協議を進めたいと思っております。平成 29 年度の到達目標については、ご助言、ご意見をいただけますよう、よろしくお願ひしたいと思ひます。</p> <p>それでは、次第に従ひまして会を進行させていただきます。まずは次第にございますように、協議事項に移りたいと思ひます。各研究での計画と取組について、説明を受けた後、それぞれについてご協議をいただくという形で進めたいと思ひますが、それによろしいでしょうか。</p> <p>それでは、次第にありますように、高知南中学校・高等学校における取組、それから高知西高等学校の取組、それから新たに 7 月 1 日、高知国際中学校・高等学校が開設するということになりまして、その高知国際中学校・高等学校の取組についてそれぞれ協議をさせていただきたいと思ひます。</p> <p>それでははじめに、グローバル教育プログラムの英語教育及び探究型学習について、教育センターの方からご説明をよろしくお願ひいたします。</p>
教育センター・チーフ	<p>おはようございます。それではグローバル教育プログラムについて説明をいたします。どうぞよろしくお願ひします。</p> <p>まず、このグローバル教育プログラムですが、高知南中高校を推進校としまして、探究型学習と英語教育を開発・実践しています。その研究を教育センターが一緒に行っているものになります。昨年度までは、探究型学習と英語教育のそれぞれの取組をまとめて報告をさせていただきましたが、研究 3 年目を迎へまして、それぞれ課題を分析したときに、同じような課題が出てまいりました。そこで本年度はその共通した課題に基づいて、探究型学習と英語教育プログラムの概要を 1 枚の資料にまとめております。</p> <p>資料 1 をご覧ください。まず平成 29 年度の当初計画を 4 つ設定しましたので、4 つの方向性について説明をさせていただきます。そのあと、各方向性ごとの取組状況について説明をいたします。</p> <p>P のところ、平成 29 年度の当初計画をご覧ください。本年度は取組主体を明確にしております。一つ目は「授業者が指導と評価の一体化を目指す」として、生徒との目標の共有や目標達成につながる学習活動の設定と評価を通して、学習指導の改善を行っていきます。そのために、生徒の学びのプロセスの見取りや目標に沿った評価方法の研究をします。また、英語教育ではその目標を CAN-DO リストに基づいて設定し、評価することについて研究をしていきます。また、グローバル教育、校内研修会において全教職員が教科横断的に研究・協議を行うことを予定しています。</p> <p>2 つ目の方向性では、「生徒は自己の学びを適切に振り返る」として、昨年度、当委員会の中でもご助言をいただいております、生徒の学びの内省を効果的に行うためにはどのような手立てが必要か。生徒の振り返りの手立てを研究し、主体的な学びにつながるようにしていきます。</p> <p>3 つ目の方向性です。「学校は教科会やチーム会を活性化する」</p>

として、教科会やチーム会を活性化して、平成30年度から教科会やチーム会を核にして教職員自らの力で授業改善を行うことができるようにしていきたいと考えています。まずはこの研究の最終年度にあたり、改めて目標と取組をつなげて考えることも重要であると考えましたので、全教職員で高知南が目指すグローバル人材を再確認し、育てたい資質・能力を教科横断的に育成する授業づくりについて取り組んでいきます。また、全教職員で組織的・協働的な授業づくりを目指し、教科会やチーム会の在り方について研究をします。

方向性の4です。4つ目は、「学校と教育センターは研究成果を普及する」として、平成27年度からのこの3年間の研究成果を集約し、研究の観点や実験事例をまとめます。併せて県内の先生方が探究型学習や英語教育を実践するにあたって、授業づくりと参考となる指導の手立てや評価のポイントを成果物としてまとめていきたいと考えています。また、教員の授業づくりに対する意識の変化がどうだったのか。生徒の学びの変容はどうだったのかをさまざまな調査等から分析をして、この3年間の研究の成果とともに考察していきます。

このような4つの方向性について、それぞれ現段階での取り組み状況と課題、また今後の取り組みの方向性について説明をします。

まずDのところになります。取組の1についてです。年度当初に全教職員が授業改善の計画を作成し、授業改善の見通しを持つことができている。また、公開授業の共通目標に生徒の学びのプロセスを見通すこととして、全教職員が公開授業を実施するようにしています。6月までに高知南中高に常駐している指導主事が参観した授業の数は39回となっております。教科の内訳は資料のところに参考として示させていただいています。その大半が学校の目指す授業改善の方向性に沿ったものではありませんが、中には明確な目標が提示されておらず、生徒との共有が充分ではなかったり、設定した目標とその後の授業の展開での学習活動が繋がっていないかたりとする授業も見られております。そのため、グローバル教育校内研修会での研究授業では、育てたい資質能力を明確に設定し、その資質能力が身に付いたかどうかを評価する授業を提案するよう、授業者と協議を重ねているところです。

個別の取組状況では、探究型学習では今年度は全教科で協調学習を取り入れた授業実践を行うようにしています。そのため、全教科において年間指導計画に協調学習やアクティブラーニング型授業を位置付けて、意識的に学習指導の工夫、改善をするようにしています。

英語教育では、授業での生徒のゴールの姿を明確にして、先生方がバックワード・デザインを意識した指導ができるようになってきています。また中学校では授業で育てたい力がどれだけついているのか、段階的に把握し、その後の指導に活かすことができるように年間の評価計画を作成しているところです。この計画によって、他学年を担当している教員も、それぞれの各学年で育てたい力がどうなのかを把握できるようにしたいと考えています。

これらの取組状況から先生方が指導と評価の一体化を意識し、授業改善に向けて取り組んではいますが、授業の目標に設定した育てたい資質や能力は漠然としていることもあります。そのため、

生徒の目標達成状況を適切に見取ることができていない場合が見られています。ですので、少し取組状況のところでも示しましたけれども、グローバル教育校内研修会をまずは2回開催する予定です。1回目は何ができるようになるかを意識した授業を公開し、全教職員で教科横断的に研究協議を行います。2回目は高知南が目指すグローバル人材像を確認するとともに、教科で身に付けた力によって、生徒はどのようなことができるようになるかという視点で協議を行うようにしています。

続いて、取組2についてです。「生徒の内省を促す手立てについて」。探究型学習では、授業後にどのようなことができるようになるかというゴールイメージを生徒と共有することで見通しを持たせ、このゴールへの到達度を生徒自身が適切に振り返ることを授業の中に位置付けるようにしています。

英語教育では、生徒自身が英語運用能力を把握できるように、単元の目標に照らして生徒の自己評価や生徒同士の相互評価を取り入れています。また、授業者が生徒の学びの状況に応じて、その場で肯定的評価をフィードバックしたり、授業者との対話によって生徒自身が課題に気付くように働きかけをしたりしています。このような取組は先生方の授業設計に取り入れられるようになってきております。しかし、課題としては、振り返りの内容や設定について、授業者個々に任されているところが多く、効果的なものになっているのかどうか、検証が不十分な場合があります。そのため、設定された振り返りが主体的な学びにつながっているのかどうか、またさらに生徒の学習意欲を高められるように、振り返りの視点や効果的な振り返りの活用について授業事例を基に分析して、研究していく必要があると思います。

今後の取組としては、どの授業でも単元の中でも、その1時間の目標の位置付けを生徒に具体的に示し、またそれに対して生徒自身ができるようになったのかどうかを振り返るように、授業の中に位置付けることを確認していきます。また授業で生徒がどのように振り返ることが効果的であるかという視点で、教科会を使って協議をするように設定をしていきます。

続いて、取組3についてです。授業で設定した目標をもとに、授業者は授業の振り返りを行うことについて教科会で検討するようにしています。併せて探究型学習では、チーム会の中で生徒の学びが深まっているのか、高知南中高で育てたい資質・能力が身に付いているのかを分析することとして、年間計画を作成しています。

英語教育では、目指す生徒像の実現と英語運用能力の向上に取り組むことを教科会で共有し、生徒の様子や指導方法を話し合っただけで授業改善につなげています。英語教育や探究型学習では、これまでも教科会で授業研究を進めてきましたが、このグローバル教育プログラムの研究に直接関わらなかった教科、例えば探究型学習では、昨年度までは5教科での実践研究でしたので、それ以外の教科においては教科会の場で授業について話し合うということは余り活発にされておりました。そのため、指導方法の研究については、教科によっても差が見られております。

資料のCAのところ、取組3のところにお示しをしていますグラフがあるんですけども、これは昨年度のアクティブラーニング型授業の実施状況を国・社・数・理・英の5教科とそれ以外の教

科とを比較したものです。黒く塗りつぶされている方が5教科以外、白い方が5教科の実践状況になります。学習形態の工夫という点から見ると、実践研究を行ってきた5教科の方は指導方法に工夫がされているということは見えますし、同じ教科であっても教員間で取り組みに差が見られております。そのため、チーム会を核にして組織的に取り組む体制を整え、全教科で授業改善に取り組んでいくようにしています。

また、高知南の目指すグローバル人材について全教職員で確認し、それを授業の中でどのように育成をしていくのかを教科会で話し合っ実践していく、いわゆるカリキュラムマネジメントの視点でも研究をしていくように考えています。これらの方向性3の教科会、チーム会の関係化は方向性1の「指導と評価の一体化」、方向性2の「生徒の内省を促す振り返りの実践」を全教職員で取り組むうえで、相互にリンクをさせながら研究を進めていかなくてはならないと考えています。

最後に、取組4についてです。研究成果をまとめるにあたって、教員の意識調査を実施して結果を分析し、普及内容を検討していきます。探究型学習では、授業改善に向けて取組の重点の個人個人の達成度ですとか、どういう取り組みをしたのかという取り組み状況、また学習形態の工夫をしているかということについては、今までも調査をしています。それらの結果について継続的にまた分析をしていきますが、それ以外に、この研究を始めて先生方がどのように変わったのかということ、また授業づくりへの意識調査も調査用紙をその中で作成をして7月に実施をするようにしています。

英語教育は、英語学習への意識実態把握調査と英語教育プログラム意識調査、それぞれを実施することにしています。それぞれ生徒対象と教員用ということになっています。昨年度までの生徒用の意識調査の結果によりますと、平成27年度、平成28年度、それらを比較した場合に、中学校も高校も「授業の理解度」ですとか、「授業に積極的に英語を使う」ですとか、「課題に対して自分の考えを持っている」というような、英語学習への興味・関心自体は高まってきているように思います。ただ、学年によって差が見られるということもあがっています。

今回、その資料の中にまだ今年の平成29年度第1回の分は集計中でしたのでお示しすることはできていませんが、先日ちょっと集計結果の速報がありまして、平成29年度、今年の中学3年生の第2回の調査結果を見たときに、今の中学3年生が1年生のときと比べると、「課題に対して自分の考えを持つこと」ですとか、「積極的に英語を使うこと」への数値は1年から比較すると伸びてきています。授業の理解度も高くなってきています。この3年間の英語学習による意識調査を授業者の指導の手立てと関連付けて今後、分析をしていきますので、その結果については次回、お示しをさせていただきたいと思っております。

このような調査のデータが各種あるのですが、その分析とこれまで実践につなげた検証は十分にはできておりません。これからはデータを分析して研究成果を普及できるようにまとめていきたいと考えております。

以上でグローバル教育プログラムの報告を終わります。よろしくお願いたします。

<p>座長</p>	<p>ありがとうございました。高知南中高等学校のグローバル教育プログラム、探究型学習及び英語教育プログラムについてでした。今回のシートにつきましては合わせた形でまとめており、3年間の研究を進める中において、2つの取組については非常にリンクをしているということで、大きな4つの方向性と7つの方策ということで、ともにワンペーパーの中で示させていただいたということでございます。</p> <p>それでは、両方一気にというところとちょっと広がり過ぎると思いますので、まずは英語教育プログラムの方については、先ほどのご説明について、ご意見等ありましたらよろしくお願ひいたします。</p> <p>ございませんでしょうか。ご質問含めて結構でございます。よろしくお願ひいたします。</p>
<p>委員</p>	<p>内容的に充実してきたなというのが良く分かる資料で、ありがとうございました。</p> <p>29年度当初計画の方向性の1の中に、「指導と評価の一体化を目指す」ところですね、「生徒の学びのプロセスの見取りと目標に沿った評価方法の研究」というのがありますが、どのような手立て、どのような方向でやろうとしているのか、もう少し具体的に説明していただけますか。</p>
<p>教育センター・指導主事</p>	<p>失礼します。よろしくお願ひいたします。</p> <p>先ほど、質問があったことにつきましては、4月の教科会で昨年度までの取組の経過と課題を確認しました。一番の課題は、先生方が生徒の変容を十分捉えることができていない、感じていないことでした。昨年度の2月にグローバル教育推進委員会が南中高で行われたあとに、委員に授業を見ていただき、研究協議の方にも入っていただきました。そのときCAN-DOに向かっていく目標を短いスパンで設定していくこと、そして50分の授業の中でも生徒の変容が見られるように、きちんと先生は基準を持っておくこと、というご助言をいただきました。</p> <p>そのことについて、南中高英語科では今年度は、単元の終わりに生徒が具体的にどのような英語を使って話すこと、書くことを目標にするのかを先生方は一回、紙に書き起こすようにしました。それに基づいて、バックワード・デザインで1時間、1時間の授業をし、最後にはその目標に照らし合わせて、どのような評価をしていくか、パフォーマンステスト、その採点基準を事前に立て、生徒の変容を見るようにしているところです。</p> <p>2年間の研究を通して分かってきたことは、評価規準をどのように設定するのかというところがやはりしっかりしていないと、客観的な評価ができないということです。そして、評価のB基準をしっかりと設定をして、客観的に測れる方法を考えていこうと取組を進めています。</p> <p>今年度はルーブリックを作り、パフォーマンステストをすることを実際に行っています。夏休みにCAN-DOリストの見直しとCAN-DOリストの達成状況を把握検証するようにしています。以上です。</p>
<p>委員</p>	<p>何か具体的なこう、変更点みたいなものは、授業づくりの中で</p>

<p>教育センター・指導主事</p>	<p>あるんですか。</p> <p>具体的な変更点は、単元の目標とともに1時間の目標も生徒に示すという点です。先生方は単元の目標をしっかりと設定して授業をしています。そして子供たちに単元の目標を最初にイメージを持たせているのですが、その単元の目標とそれぞれの1時間との関連が先生方の中にはあるんですけど、生徒にはちょっと伝わっていないんじゃないかなということを授業参観のときに感じました。なので、目標を授業の中で示すときには、単元の目標とともに1時間の目標も示しながら単元のゴールに向かっていくということを確認しました。</p>
<p>委員</p>	<p>ありがとうございました。もう1点、この「目標に沿った評価方法の研究」というのは、最終的に評定をつけるまでの評価という意味ですか。それとも、中間的な評価も含めてですか。</p>
<p>教育センター・指導主事</p>	<p>評価の観点を決めていても中間評価でもそれ以外のたくさんの観点を見たくなるんですが、やはりその目標に沿ったところを中間評価でもきちんと見て、生徒に振り返りをさせながら全員が最後の目標に達成できるようにしたいというふうに考えています。</p>
<p>委員</p>	<p>ありがとうございました。評価、評価と言うと、どうしても成績を付けるための総括的評価のこととなりがちで、それをどう客観的に付けるかっていうことになります、なりがちですけど、主体的な学びとかっていったときに、そのプロセスが大事なので、いわゆる形成的評価というか、その時点での評価を返してあげて、それでさらに成長する機会をやるというふうな評価を、ぜひ忘れずに進めていただけたらと思います。</p>
<p>委員</p>	<p>では、今のことに関連してプロセスの見取りと評価方法では、すごく大きくて難しいトピックだと思うので、いくつか気付いた点だけ申し上げます。先ほど指導主事の方で単元の目標を1時間の目標に落とし込んでいくというのが、先生は分かっているけど生徒は分からないということだったんですけど、これは非常に先生でも難しいところがあるんじゃないかなと思うんですよね。単元目標というと、具体的には1レッスンかもしれないし、2レッスンかもしれない。割と大きなスパンで「これができるようになる」みたいなゴールを決めるわけですよね。</p> <p>そうするとそれが1時間、1時間積み上げてやるわけですが、でも、うまく積み上げてその結果がリニアというか一直線につながるかどうか分からないし、それを今までの経験で、経験則でうまくやらないといけない。理屈で計画を立てても、子どもたちと、活動してみたらここは、飛んでしまったとか、ここは1時間でやるつもりが2時間かかったとかっていうのは、多分、今までの経験で分かると思うのです。その辺りを今までの経験に基づいて現実的にできるような計画を立てていかないといけないと思うんです。特に発信力については、まだまだ経験が不足しているのかなと思うんです、特に高等学校では。ですから、今までのことをきちんと振り返って、ここは難しかったから時間を費やさなきゃとか、評価規準にしても、これとこれを教えるのが現実的だなと</p>

か、そういったところの計算をしなければいけないことが難しいなと思ったのが一つ。

それからもう一つ、どうしても目標ということがあると、これに向かって何かをやらなきゃいけないと、この時間ではここをカバーしなきゃいけないと、カバーするということに集中してしまうと、授業自体が機械的になってつまらなくなる危険性があるので、細かいところの身のこなしの振り返りをすると良いと思います。例えば、1時間の中で生徒に考えさせる時間をちゃんと持ったかとか、ウェイトタイム（生徒に考える時間を与えること）があったかとか、あるいは教室に入っていったときに先生がやる気のある笑顔で教室に入っていったかとか、そういう細かいこと。あるいは生徒が何か言ったときに、皆で拍手をしたとか、何て言うんですかね、「目標」が頭にあると、その目標のためにコンテンツをこなすということに集中してしまいがちなのですけれども、それと同時にうまく流すための細かな工夫というか、細かな心配りというか、そういうことも同時にやっていく必要があるなと思いました。

委員

どうもありがとうございます。国際バカロレア教育の学ぶということの中に評価の方法や振り返りの重要性が入っています。私が一番素晴らしいと思っているのは、トピックの上に上位概念を設定するというところですね。

例えば、高知を英語で世界に向かって発信する。これはトピックで、いわゆるプロジェクトですね。ですが、その上の上位概念というのを設定していくんです。上位概念とはいわゆるコンセプトなんです。時間や場所を超える普遍的なものであり、抽象的なものです。ですから、高知を英語で世界に向かって発信する、もしこれがトピックだとすると、例えば、その上の上位概念としては、もし私がつくるとしたら、「宣伝は人々の選択肢に影響を与える」といったコンセプトをつくったりします。そうすると、「宣伝は人々の選択肢に影響を与える」というのは、これは50年前も影響を与える、100年前も影響を与える、今も影響を与えている。これだけではなくて、世の中で流行ったものとの宣伝の関係でどうだったのかとか、経済的な観点から見たらどうだったのかとか、いろんなアプローチの仕方があるんです。普遍ですよ。だからまず、その上位概念を設定するというところを取組の一つに増やしてみたらどうかと思います。

なぜかという、バカロレアの最終的なゴールは多分、TOKに集約されるんじゃないかと思っています。そのTOKっていうのは、その普遍的な概念、時間も場所も超えての普遍的な概念で、今までいろいろ学んできたよね、でも果たしてそれって本当なの、その問いかけから始まるわけなんです。だから、「宣伝は人々の選択肢に影響を与える」って普遍的なのか。それに対して、それでいいのかっていう問いに対して問いを立てるんです。それを検証してみると。それがいわゆる考える力につながっていくんです。

ですから、グローバル人材に必要な資質って何だろうって考えるとき、私は最も重要な資質っていうのは、考える力なんじゃないかと思っています。この考える力を養うためには、トピックやプロジェクトで終わらせると、面白かったねとか、こんな英語のやりとり覚えてたねとか、こんなふうにはリサーチすると良かったねとか、

	<p>そういうスキルの方は覚えますが、その上の考えなくではいけない、教育の中で最も重要な部分にまでは到達していないのかなと感じます。</p> <p>ぜひ、この取組の一つに、上位概念を設定するというのをに入れていただけたらと思います。</p>
座長	<p>ありがとうございました。ほかには、どうでしょう。</p>
委員	<p>非常に分かりやすいご説明ありがとうございました。すごく分かりやすかったし、着実に前に進んでいるなという感想を受けました。</p> <p>まず、PDCAに沿っていろいろ計画されていて、今までされていた議論が着実なものになって、成果になりつつあるなというのを感じさせていただきました。あとご発表もそうですし、資料も非常に見やすくなっていて、これ自体はすごい改善が行われているというのが、第一印象でありました。本当にいろいろ大変だったと思いますけど、ありがとうございました。</p> <p>他の皆さんが既にほとんどの良いことと重要な点はおっしゃられたので、私は別の角度からご質問させていただきます。</p> <p>今、取り組まれている南中高とか、西高校は、能力的にエース級クラスの方々をご参加されているので、こうやって進んでいるのですが、もう一方で、方向性4のところにあつたとおり、この研究成果とかをいかに普及させるというのがもう一つのテーマとしてあると感じています。昨年非常に良いものをつくられて、「高知県の授業づくり Basic ガイドブック」、これ今でも私も持っており、役立てたりするのですが、その評判がどうだったのかということと実際どのくらい使われているのか、現時点で気付かれている改善ポイントとかがあるのであれば、ちょっと教えてほしいというところです。</p>
座長	<p>ありがとうございました。教育センターの方でお答えできれば、よろしく願います。</p>
教育センター・所長	<p>失礼いたします。Basic ガイドブックにつきましては、教育センターの年次研修、初任者研修、年次研修等で使用して、3年目となっております。全講習での活用を進めております。小中では活用がほぼ100%近くまで進んでおりますが、残念ながら高等学校の方が昨年度40%台でした。ちょうど今、その高等学校への活用ということで、高校補足版というものを作成しております。それを基に、普及を進めようとしているところでございます。</p> <p>改訂学習指導要領の内容等も反映させますので、今、改訂版の作業も進めております。その改訂版の目的は次期学習指導要領の内容を反映させる、教える部分と学ぶ部分がバランスを取るといった部分を含んでいます。それから1時間の授業構成が中心となった説明となっております。そこに年間指導計画と単元の計画を入れて、そのうちの1時間の事例という形で示そうとしています。このような点が大きい改定のポイントとなります。以上です。</p>
座長	<p>ありがとうございました。他にございませんでしょうか。</p>

委員	<p>小さい質問ですけど、目標設定のときに、生徒は目標を共有していますか。例えば、目標は生徒にも様々で、いろんなレベルの目標があると思います。1年間とか、学期とか、クラスとかあると思います。そして個人レベルの評価も反映するかどうかもあります。英語学習は個人差が大きいので、自分の目標を設定することがまず大事です。その目標の中で、自分の小さな目標を設定して、この1カ月でこれを頑張ってみるとか提案したいです。そのような目標設定は授業の中に入っていますか。すごい何かモチベーションが上がるかなと思います。</p>
座長	<p>その点についてはどうでしょうか。</p>
教育センター・指導主事	<p>失礼します。その点についてはやはり弱かったなというふうに思います。全員が単元末にはこういうことができるようというのを目標として示しています。</p> <p>個人の振り返りについては、その目標に対して毎時間、毎時間ではないですけど、振り返っているんですけど、それは自分できちんと立てた目標についてということにはやっぱりなっていません。そこをどういうふうにしたらいいのか、もしご助言いただけるならばお願いします。</p>
委員	<p>目標設定は授業でも取り入れるべきだと思います。私は大学院でライティングを教えています。大学院生はライティングが苦手で、英語で論文を書くことができない学生が多いんです。学生には自分の目標を設定させて、ほかの学生に報告させるようにしています。そして、授業の最後にどこまでその目標を達成できたかどうか、自分が見た感じで相手がどこまで達成できているか、要するにお互いの目標の設定と目標の報告をさせます。そして、自分と相手がお互い評価することが授業でできます。例えば、1カ月の目標とかを自分で考えて報告することが大事だと思います。スポーツと一緒にだと思うので、まずどこまでそれを改善できるかどうかだと考えます。</p>
委員	<p>今、先生がおっしゃったことはすごく大事だなと思ったので、コメントしたいと思います。今日、本年度のテーマということで、「主体的な学びや協働的な学びを通した学習の在り方について」とあるので、それについてちょっと考えてみたんですが、多分、目標が外から与えられると、主体的な学びというのには逆行してしまう危険性があるなと思って、これは生徒にも教員にも言えることだと思うのです。教員にも例えばグローバル教育、「こういう生徒を育てましょう」という、教科会で目標が掲げられると、それに対して多分、それぞれの先生方は微妙に個人の哲学は違うところがあると思うんです。全く同じじゃなくてもいいんですけども、それを話し合いながら、こういうふうには持っていかうってやらないと主体的にはならないなと思いました。生徒も同じことで、今、先生がおっしゃったことで、僕はここまでできるけど、これができない、と認識することで初めて多分やる気になるのかなって思いました。</p> <p>リーディングの手法の中で「KWL」というのがよくあるんですね。最初に「Know」というのがあって、何を知っているか。そ</p>

	<p>れから「W」は「Want to know」なんですよ。ここまで僕は知っているけど、この文章を読んでこれを知りたいなみたいなのがあって、最後に読んだ後に「L」かな。「Learn」なんですよ。目標にも同じことが言えると思います。ここまではできるけど、これができないからこれを上手くしたい。それで、やったら上手くできた。それが多分、主体的な学びにつながるかなって思います。ちょっと長くなりましたけど。</p>
<p>委員</p>	<p>この評価の問題、大きなテーマとして設定してくださったのは非常に重要なことだと思うし、今の議論もぜひ踏まえていただいて、精密なその指導と評価のサイクルをつくるのが目的ではなくて、一言で言えば、生徒が自立した英語学習者になるかということが目標なわけですよ。これまでも授業で英語読んだと。「えー、もっと読んでみたい。何か面白いな」とか、授業で先生の指示のもと書いたけど、「え、書くことって面白いんだな。人に自分の言いたいことをこう伝える。それで返事が返ってくるんで、また読むっていうのが面白いね。じゃあまたもっと書いてみよう」とかっていうふうに思うようになるということが目的であって、指導と評価の一体化が目的ではないのです。学習者を自律的に育てることが目的なので、そこを忘れないように、変な言い方ですけど、先生も楽しみながら、子どもの成長を楽しみながらこの仕組みをつくってくださいというふうに思います。</p>
<p>座長</p>	<p>ありがとうございます。英語教育プログラムについては大体、今後の取組の方向性についてのご意見をいただけたと思いますので、ぜひそれに基づいてまた次回その進捗状況を教えていただければと思います。</p> <p>それでは続きまして、探究型学習の方でございますけれども、この点について何かご意見ございましたら、よろしく願いいたします。</p> <p>どうでしょうか。探究型の協調学習につきましては、3年間、研究成果を普及させるという意味で積み上げられてきました。お手元にも昨年の実績を冊子としてまとめております。6年間のイメージを持った探究型学習です。</p>
<p>委員</p>	<p>英語学習と探究型学習は両面にまたがっていると思うんです。いただいたものを見せていただいて、中学校の1年生の単元で英語や外国の文化に関心を持って理解を深めるとか、学習の目標が書かれています。先程、非常に良いことをおっしゃったなっと思いました。先ほどの評価とつながるんです。評価っていうのは大きいところの評価、その大きな目的の評価から細かいところの評価までであると思います。その一番大きいところの評価というのは、先ほど私が話したコンセプト、上位概念です。例えば、この1学期であれば、上位概念としては普遍的であり、場所も時間も超えているってことです。他国の文化を知るとは、自国の文化の再認識にも通じる。この上位概念もありますね。その上位概念に関して、1学期の終わりに自分はどれくらい分かったのかな、理解したのかなっていう振り返りがあります。それが評価なんですね。</p> <p>また具体的なスキルですね。例えば「話す力」がありますね。</p>

他に「一人でもグループでも調べる力」ってありますね。また、「共同作業に参加する力」っていうのもあるでしょうし。それから「期限までに終わる力」、「宿題をちゃんとやっている」とかもあります。その具体的なスキルですね。具体的なスキルをきちんと学年の最初に生徒に伝える。今学期はこういうスキルを私は見ますよと伝えます。自分たちもこういうスキルっていうのが、この先、社会に生きていくために必要なスキルだから、だから私はここで学んでいるんだと意識させるんです。

その評価は、振り返りのことを書いておられました。振り返りとしてはその単元が終わったときに、1週間の終わりに、今週の僕は話す力ってどうだったんだろうと振り返ります。自分で自分を振り返る癖をつけていく。もしくはグループでもいいです。今週、僕たちのチームはグループとして調べる力、どうだったんだろう。もっと来週、調べる力をつけるためには、どうしたらいいんだろう。この振り返り評価、他人から受けるのではなくて、まずは自分で自分を評価する癖っていうのをつけていかなければいけません。社会に出たら、先生がいるわけじゃないです。私の行動を私の先生が、「今週は78点だな」って言ってくれるわけでもありません。自分で自分を振り返って、今週の私よりも来週の私、今日の私よりも明日の私、今年の私よりも来年の私、こう成長を続けていかなければいけません。癖をつけるということだと思います。評価とか振り返りという、それが一番の目的なんだと思います。ですから、英語も探究型も上位概念を定めて、そのスキルをきちんと最初に定めて、そのスキルに関して、子どもたちが自ら振り返りができるような授業を設計して行ってほしいです。こここのところが私は重要なんじゃないかなと思う次第です。

座長

ありがとうございました。探究と英語合わせた形でそれぞれの方からお話がありまして、ほかにはございませんでしょうか。

校長

南中高の校長です。報告がごさいます。今年度、概要目的のところ、30年度をイメージして協議するという大きな目的があります。この取り組みは今年3年目ということで、一定の方向性を出していくという大きな命題があります。学校にとりましても、それから県にとりましても、30年度以降、後継的なことも考えて今年一年取り組みたいと思っています。

その根拠は、第2期の高知県の教育振興基本計画がごさいます。計画には31年度まで、本校の探究型学習も続きます。西高校も含めまして、統合というゴールイメージがあり取り組んでおります。その県の大きな基本計画のもとで取り組んでいくということを意識してやっていきたいと思っています。

委員さんからちょっとお褒めにあずかりましたけど、この資料は最初、教育センターと協議をしている中で、いろんな要素が出てきました。やはり一番危なかったのは、指導と評価の一体化というところでありました。どうしても誰が主体になっていくべきかということがはっきりしなかったので、冒頭に「授業者は」とか「生徒は」とかいう主語を、主体者を明確にしていくということで作成しました。最初は大きい項目が3つだったんです。それは「指導と評価の一体化」がかなりの部分を占めていましてので。しかし、2年間の議論の中で生徒の内省という問題なんか

<p>座長</p>	<p>が指摘されました。学校の授業の実態を見ていく中で、主体的で対話的な部分はある程度、到達できているんじゃないか。しかし、深い学びに至るまでにはまだ時間を要すると私自身も思っております。そこで生徒にも主体になって考えてもらう。それは教員が仕向けていくということもあるんですが、やはり方向性の頭出しの中で、「生徒は」というところを設けました。</p> <p>大きな幹になるものは偶数で、個別のものは奇数がいいだろうということで、最初は四つと 11 だったんですけど、「指導と評価の一体化」はもっと整理をした形で 7 つの方策で、まとめさせてもらいました。</p> <p>昨年来、「上位概念」のお話があり、また深い学びに至るまでに授業者がスキルやコンセプトを示して、指導した分を評価するというのを、ルーブリックでまとめていくことが大事であるとおっしゃっていて、今年一年取り組まなくてはいけないというふうに思っているところでもあります。以上です。</p> <p>どうもありがとうございました。まとめていただきました。</p> <p>それでは、また次のシートを進める中で、振り返っていただいても結構だと思いますので、次の 2 枚目の資料、資料 2 の方で議論、協議を進めたいと思います。</p> <p>今まで、このシートの昨年までの形式でいきますと、高知西高校については統合に向けて、まずは SGH（スーパーグローバルハイスクール）を行っておられたので、それを中心に 2 年間ずっと進めておりました。ですが、いよいよ 30 年度の方向性を見たときに、もっと議論していただくという部分においては、やはり新たな高知国際高等学校へつなげていくという意味で、高知西高校が今、どういう状況で、そしてどういった形でそれを高知国際中高等学校につなげていくかといった視点を、少しご意見をいただければということで、資料 2 のような形式に代えさせていただきました。</p> <p>それでは、高知西高校の方、当然のことながら SGH の内容も入れさせていただいて、全般として高知西高校と高知南中学校高校が大きな目標として、高知国際中高等学校へ向かっていくにあたって、今の状況、そして今後どういう方向性を考えているのかということをご説明いただきたいと思います。高知西高校、よろしくお願ひします。</p>
-----------	---

【高知西高等学校の取組について】

○スーパーグローバルハイスクール事業等について説明・協議

高知西高校・副校長

失礼いたします。4月から高知西高校副校長として赴任しております。7月1日からはそれに加えて、高知国際中学・高知国際高等学校の副校長を兼務しておりますので、両校を合わせて進めていくというところから、ご説明をさせていただきたいと思っております。

資料2をご覧ください。まず、Pの部分でございます。

まず、一番上に高知国際中学校・高等学校の目標を記しております。これは、統合が決まるときに教育委員会の方で定めていただいたものでございます。時間もありませんので、一つ一つ読み上げませんが、グローバル人材の育成を目指すとともに、やはり高知県に求められている、いわゆる子どもたちがしっかり社会で活躍していくためには、一定、大学進学等の生徒の進路実現がもためられます。本県は、全国と比較しますと、大学進学率が10ポイントぐらい低い状況にありますことから、高知西高校、高知南高校の生徒の進路実現という使命を果たすという意味で、目標とする国公立大学進学者数を記載しています。もちろん、この高知国際中学・高等学校は国際バカロレア認定を目指す学校でございますので、この国際バカロレアでの教育実践をどういうふうに進めていくのかということも課題となっております。ただ、これらは高知国際中学校・高等学校の目標でございますので、隣のBは空欄でございますが、最後のCAのところ、課題と今後の取り組みの方向性の部分をご覧ください。

まず、国公立大学進学につきましては、この春の高知西高校の卒業生、現役で97名の生徒が国公立大学へ進学をしております。さらなる発展ということを見据えたときに、うちの学校は英語科がありまして、昭和43年から英語科がございます。世間一般にも文系の学校だということの認識はどうもあるようでして、やはりバランスの良い、これは国際バカロレアにも通じるものだと思いますけれども、文系、理系ともに充実した教育に努めることが大事であるというふうに考えております。平成30年度から高知西高校につきましても、教育課程を変更しまして、理科の単位数を増やしていくといった取組を実践するようにしています。

それから、あとでご説明しますけれども、スーパーグローバルハイスクールへの取組をしっかりブラッシュアップしていく。これが先ほど、話にもありましたけれども、TOKにつながっていくような取組にしていくことが課題だと考えてございます。

それからあと、人事的などところもでございます。今年は正規の講師として外国人教員2名、教育委員会の方で採用していただきまして、通常の授業に入っておるところです。またここも詳しいことは、あとで説明します。ただ、IBDPの規程の中で6つの教科のうち2つの教科は英語による最終試験ということになっておりますので、こうしたことに対応するために、まだまだ外国人教諭の確保というのは必要だということが課題でございます。

それから、最後のところですが、中高一貫教育の、充実した教育環境というところなんです。実は先日、札幌開成中等教育学校を訪問しました。私にとっては、2回目の訪問になりました。同校は、ちょうど中学1、2、3と今、3年間の取組を踏まえた中で、やはりそのICT環境、非常に重要であり、1人1台PCが必

要であるというようなお話も聞いております。本校は今のところ、200台学校にありますので、その活用は進めていますけれども、IBに向けたそういった環境づくりといったところも大きい課題の一つなのかなと思います。高知国際中学校には、まだ生徒も保護者の方もおりませんので、保護者の方とどういふふうに連携を、その辺りも見ていくのかっていうところが課題になってくると考えておるところでございます。

では次、具体的な本校の取組で、またPのところに戻っていただきまして、1.平成27年に教育委員会が示した29年度までの本校における取組というところでございます。これは3年間の計画の中で最終年に今年が当りますが、まずグローバル教育プログラムの試行ということで、スーパーグローバルハイスクールの取組を進めております。

それから、英語運用能力の向上としまして、生きた英語を学ぶということで、ALTそれから外国人講師の配置、それからICT環境の整備といったものを挙げていただいております。それから国際交流として、海外長期派遣の実施や海外留学への支援の充実といったところを挙げていただいております。現在、6月までの取組みになりますが、D0のところにつきましては、まず、スーパーグローバルハイスクールについては、下段になりますので、後ほど説明いたします。

生きた英語を学ぶ体制としましては、配置されました2名の外国人講師が昨年までは英語科の授業だけだったんですけども、今年から普通科の1年生の授業も担当しております。2名とも初任者ということで、研究授業を、私たちも拝見しまして、やはりその生徒からすると日本人の先生じゃないので、もう日本語が通じないと。だからもうのっぴきならず、英語を使わざるを得ないという中で、非常にシャイな生徒のイメージを私は持っていたんですけども、割に意外に、例えば男子生徒の方が活発に発言をしたりという場面も見られまして、やはりこういったその環境、その英語を使う環境に置くということの重要性というものを、わずか3カ月ではありますけれども感じておるところでございます。今後もこういったこと、取組を引き続き進めてまいりたいと思っております。

それから、ICT環境なんですけれども、4月に赴任しましてびっくりしたのは、Wi-Fi等の整備をしていただいていたんですが、ちょっとルーター、要するに水道管で言えば水道管が意外に細くてですね、40台しか台が使えない状況でございまして、早速お願いをしまして、水道管を太くしていただきました。おかげで200台が一斉に使えるようになりました。

このICT環境というのも、今回非常に感じたのは、やはり一定のレベルまで使えるような状況になると、生徒の使用度というのは格段に上がるということが良く分かります。休み時間等も貸してくださいということで、実はその授業だけでは収まりませんので、1、2、3年生とも放課後の時間なんかも活用して、自分たちで調べ、そして2年生と3年生は論文というところちょっとおこがましいので、リサーチペーパーというふうに呼んでおりますけれども、生徒たちはリサーチペーパーの執筆活動を非常に積極的に行っております。ですからやはりその、なかなかつながらない、たまにつながるよとか、今日はつながらないねというような環境

では、やっぱりそういったところは育たないんだなというようなところを感じておるところでございます。具体的なところはここに示しておりますので、またお読みください。

それから、国際交流ですけれども、高知西高校はオーストラリアの姉妹校であるフレンズスクールと提携校であるタレマースクールの2校に交換留学として、隔年でこれまで生徒を送っております。それ以外にも長期留学、何とか増やしたいという意識付けということで、SGHの中でも多くの国に送るようにしておりますけれども、この度ようやく、「トビタテ！留学 JAPAN」の活用者も出ました。サッカー部の生徒でして、スペインにサッカー留学に行くこととなりました。こういった単に語学力を磨きたいというだけではなくて、その自分が興味関心のあることを、そのスキルをより伸ばすための留学ということがようやく取り組みが始まりました。ぜひこれを機に、どんどん生徒にもチャレンジしていただきたいというふうにご覧いただいております。

ここまでのところの課題としまして、CAのところをご覧いただいたらと思いますけれども、やはりその活発に生徒が活動しますと、それだけどうしてもご家庭の負担も増えてまいります。今、やはり試行しながらですので、これが3年目ですが、4年、10年と続いてくれば、おおよそこれぐらいのお金が必要なんだよといったところが、学校としても示しやすくなっていくだろうと。今のところまだ、その派遣先を開拓しながらやっておりますので、急遽、こんなところに行けるようになったよってなると、なかなかそこへの支援に手が回らないという部分もございまして。だから高知県の家庭環境も考えますと、こういったところも課題になってくるのかなというところがございます。

それから英語運用能力向上のところ、外国人教員の配置というのはIBでは必須であると考えております。ただ、普通科では一つ課題が出るのが実は補習でございまして、プラスアルファで外国人講師が増えていくのは大歓迎なんです。例えば英語の教員が10人ですよ、外国人2人が4人になったので、日本人は8人から6人に減らしますよということになると、補習の担当は、やはり日本語が充分操れない講師の場合にはちょっと難しいのかなと思います。とは言いつつも、例えば英検の2次の指導ですとか、そういったことは外国人講師が担当しております。ですからいわゆる今までの大学入試対策っていう部分でいうと、余り増えると、授業は充実するんだけど、ほかの指導のところでのバランスというのでも必要なので、今後、何名の配置が適切なのかということはおわが校としても考えていかなければならないものだと考えているところです。

それから国際交流につきましては、まずはやっぱり新たな交流先、留学先あるいは留学生の受入れといったものを進めていく必要があるかと思っております。実は本日も香港のルター高校から生徒さんがショートステイで来ました。そういった新たな交流先の開拓は必須だろうと思っております。特にアジアというのが交通費の面ですとか、あるいは時差が少ないので、普段の交流ができる。テレビ会議システム等を使ってしっかり交流したうえで行くことが望ましいと思うんですけれども、そういったことを考えますと、あまり時差があると難しいのかなというところがございます。

それから、今、スーパーグローバル大学の取組を各大学様の方

が進めておられて、いろいろな大学から国際交流の企画のご提案がごございます。先日も筑波大学がされておりまして、生徒には紹介はしておるんですけども、そういったところにもぜひ、積極的に参加をさせたいというふうに考えておるところです。ただ、まだちょっと費用面が先ほども申しましたように、課題ではあるうかと思っています。

それから次に、高知西高校の取組ということで、一番下の欄になります。まず本校のアジェンダ N2017 ということで、学校経営計画をこういう形で作成をしまして、全職員が共有して取組を進めているところです。いわゆる幅広い教養、学力とそれから、たくましい心身と、それから社会貢献の志という3本柱で、それを育てていくためにということで、まず一つ目が「学びの習慣の確立と学力向上」ということで、家庭学習をしっかりといていこうということを考えています。それから本を、やっぱり読書習慣をまず身に付けていく取組と。それからもちろん、出口指導も大事ですので、国公立大学現役で、100名以上というのを目標にしております。

それから、たくましい心身ということで、特別活動、それから部活動の充実といったこととしておりまして、まずできるだけ多くの生徒が皆勤を目指しましょうとしています。それから部活動への参加をあげています。それから学校適応、不登校とかそういった生徒をゼロにする取組を進めていこうということでございます。

それから錬歩会の完歩95%とあります。ちょうど高知市の南側の山をずっと上がっていきまして、学校まで帰ってくるだけで14キロぐらいなんですけども、そういったこう直接体を動かして、ちょっと困難があるけれどもそれを励まし合いながら乗り越えていくと、そういったことも目標に掲げております。

それから、グローバル教育の推進については、SGHの取組なんですけども、それ以外に社会貢献活動ということで、生徒にはボランティア活動への参加について、外部の情報を積極的に周知して取組を促しておるところでございます。

それから英語運用能力の向上というところでは、英検を中心に、英語科はGTECもやっておるんですけども、こういった英語教育への取組というものを進めてございます。

それから取組の2としまして、SGHの実施と磨き上げ、ブラッシュアップでございますが、今年ようやく1年、2年、3年とすべての生徒がSGHに関わるようになりまして、グローバル探究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲということで実施を進めております。それから国内リサーチ、海外リサーチ、それと今回新たに、もう実は間近に迫っておりますが、今月の13日に国際シンポジウムを開催いたします。それから英語では、多読・多聴・多話・多書の推進。それから英語による探究活動。そして3年間のプログラムの今回一通り揃いますので、そういった意味での3年間のまとめを年度末には行いたいというところでございます。

6月までの実施状況を次のD0のところを示してございます。

家庭学習時間につきましては、6月以降に、学期ごとに調査を実施するというところで、今回数字を挙げておりませんが、本の貸し出しにつきましては、1年生は非常に、去年もそうなんですけども、1年生はもう300冊以上、6月で借りていますが、2年生が去年

よりはいいんですけれども、ちょっと1年生で頑張っているんですが、2年生では伸びていないというところが、課題かなというところがございます。

それから部活動のところについて、出席状況につきましては、1年生は今のところ皆勤率も80%以上ということで頑張っていますが、2年生、3年生になってきますと、ちょっと欠席が増えだしますが、どうしても学校不適應の部分もございまして、大体多くの生徒は1日か、多くても2日ぐらいの欠席なんですけれども、ちょっと連続して休む生徒が1人、2人いるということもありまして、なかなかここは厳しいところがございます。

それから英語運用能力のところでは、1～2年生につきましては、学年1度は受験するというところで、英検を受験するというところで、もうすでにホーム費で受験料は徴収させていただいております、3年生は気がついていて、第1回で152名受けるということになりますけれども、2回以降、1年生やっぱり入ったばかりでなかなか学校生活にまず慣れるという部分もありますので、2回目以降で受験していただくように、また指導していきたいというふうに考えております。

それからSGHにつきましては、それぞれ6月までのところで、大体10回程度実施をしております、いろんな講師を招へいして、コーチングを学んだり、あるいはリサーチペーパーの進め方、書き方といいますか、そういったものを学ぶというようなことを進めております。3年生はもう個々のテーマについて、どんどん主体的に執筆活動をし、ほぼ今、終わりが近づいているところがございます。

それ以外に海外リサーチとして、香港、タイ、台湾、シンガポール、こういったところにショートステイでまいりますけれども、実際に企業や大学等々を訪問するつもりです。

それから今年新たに、シンガポール大学のグローバルリンクシンガポールという企画がございまして、アジアの高校生を集めてプレゼン、ポスターセッションをするということで、そこにも学校の方からの支援もして、4名の生徒が参加するというところがございます。

次にCAの方にまいります、ちょっと先ほどもお話をしたんですけれども、まず学習規律・学習習慣のところにつきましては、教科の担任の面談も入れております。面談週間は1学期に設定をしまして、ホーム担任が面談をするという、これは当たり前なんですけれども、生徒が希望した教科担任の面談も行うようにして、きめ細かい指導を心がけております。

それから本の貸し出しにつきましては、生徒が主体となってやるというようなことで、お勧めの本を生徒が出して、この本を読んできたというふうなことの呼びかけを進めています。

それから次の、特別活動と部活動の充実のところでは、出席状況については先ほどご説明したとおりなんですけれども、特に課題がある生徒につきましては、校内支援体制の中でしっかりと状況を把握しながら、フォローしていきたいというふうに考えております。

あと、英語運用能力のところ、先ほどお話しましたので、省略いたします。

次に取組の2、SGHのところがございますが、特に今、悩んで

	<p>いるのは、悩みつつ進めていますのは、生徒の研究スキルをどういうふうに身に付けさせていくか、どうしても短期間の勝負になってきますので、レクチャーはするんですけども、やっている教員の方もまだ十分自分のものになっていない場面もあるというふうに認識をしております。そういう中で、ただ生徒にもできるだけ初歩的なことでいいので、しっかりと押さえながら取組をどういうふうにやっていくかというところが課題でございます。</p> <p>それから、あと大学等から外部講師の方、たくさんおいでいただきますので、その都度、好評いただいておりますので、その中での意見をどういうふうに以後の取組に反映するのか。あともう少しその県内リサーチとか海外リサーチ、行えていればまた課題を申し上げられたんですが、まだちょっと実施をしておりますので、ここにつきましては、また第2回のところでこういった取組の成果・課題について申し上げたいと思います。</p> <p>以上で説明を終わります。ありがとうございました。</p>
座長	<p>ありがとうございました。高知西高校の取組について、説明がありました。ご質問等ございましたら、よろしくお願いします。</p>
委員	<p>まず一つ。キャリア教育というのが目標の中に入っていますが、実は私がやっております、NPOのインターナショナルセカンダリースクールで、主に発達障害や学習障害とかの生徒が通っている学校なんですが、非常にキャリア教育に力を入れています。ほかのインターナショナルスクールもですが、中学1年生ぐらいから何が好きか、何が得意かっていう質問から始まって、それを活かせる職業が何なのか、探っていく。その活かせる職になるためにはどういった道があるのか、それからその道に行くためにはどういったことの requirement があるのか、高校1年生ぐらいまで調べていきます。そこの requirement が分かると、どう高校2年のときには、高校3年のときには、自分がどういうことを勉強しなければいけないのか、具体的に高等教育につながっていきます。</p> <p>ですから、先生方もキャリア教育を、そのような視点で実践されると生徒一人一人の好きなこと、得意なことを活かし、生徒自身も満足を覚えていく、社会に貢献できるようになると思います。</p> <p>2番目ですが、国際バカロレアの方は、特にDPの場合、どの科目を上級コースに選ぶのが課題ですよ。例えば、医学部の場合は、数学、物理、化学の上級コースを取らなくてはならない。そうすると、外国人の教員を雇わなければいけない。教えられる教員も少ない場合どうするか。そこでお勧めするのが、タモジャの利用です。タモジャというのは、国際バカロレア機構に正式に認定されている教師なのですが、IBの教員経験が長い教師が、世界中にいろんなところにいる生徒を集めて、25人1クラスをつくってくれます。日常的にいろんな指導もしていただけます。最終的に、卒業試験だけは、その卒業試験を実施する学校で受けなければいけないというのはありますが、学校の先生は生徒が授業を受けているとか、カウンセラーやファシリテーターのような役割で確認するだけです。誰でもできる業務なんです。最終的にスコアを取りますので、その先生がついて教えるレッスンと遜色がないんです。全く同じ扱いになります。以前は1人頭850ドルだったと思います。</p>

	<p>ところが、日本のためにタモジャを改革したということを知りました。年間1人250ドルになったんです。日本は4月から始まって11月が試験ですから、始まる時と試験に関しても、柔軟に対応するということが決まったそうです。文科省に行ったとき、もっとタモジャを宣伝してこようと考えています。これを利用すれば、人件費が助かると思います。例えば、本人が物理の上級コースを取りたい場合、1人、2人だったとき、外国人の先生を雇わなければいけないと、人件費が高いですから、タモジャの生徒にすることが考えられます。</p> <p>3つ目が、IBコース以外の生徒にも、ぜひIBの真髓の考える力を育てていただきたいです。先ほど述べたその普遍の真理、本当の普遍の真理って本当なのっていうことを問い直してほしいです。それを検証して、最後のアウトプットは小論文とプレゼンテーションにですね。小論文だから、論文の考え方も覚えるし、プレゼンテーションだから、発言力も覚えるので、ぜひIBコース生徒以外の全校生徒にもTOKを履修させていただけたらと思います。考える力がすごく伸びます。</p> <p>最後ですけど、アジアの学校ということになれば、私、インドにもマレーシアにも香港にも人脈がありますので、委員ですから相談してください。</p>
座長	<p>ありがとうございました。資料3にもつながるようなお話もあったかと思いますが、ほかに何かございませんか。</p>
委員	<p>英語教育のプログラムについてです。お願いになるかもしれませんが、宿題になるかもしれませんが、これまで数年間、高知西高校の英語教育のプログラムについて資料をもらって説明をいただけてきて、ずっと出てきているのが、多読、多聴、多話、多書という言葉ですが、多く読み、多く聞き、多く話し、書くということは分かります。じゃあ具体的にはどういう生徒に育てたくて、どういうものをたくさん読み、どういうアウトプット、どういうレベルのどういうふうなアウトプットを求め、その間、どんな指導をするかということが、これまでのところあまり見えてこないというか、説明されていないと思うんですね。</p> <p>ICTとか教員採用とか、環境整備は非常に充実されてきていると思います。いわゆる核になる部分がたくさんやっていたらいいやというだけだったら、これは非常に問題だなと思います。英語の授業の中での活動の高度化みたいなこととか、ただ読めばいいわけじゃなくて、読んだことについて自分でこうクリティカルに考えたりとか、それを友達と話したりとか、そういうことが大事なんだと思います。たくさん読むことが目標ではないはずですよ。その辺のところをより具体的に次回、示していただきたいなというお願いです。そして、そこが、そこに本当に手が入らなければ、このいわゆるグローバル教育などというものは何の意味があるのということになると思います。</p>
座長	<p>ありがとうございました。SGHの部分のお話だと思いますけれども、プログラム自身はその探究という方向性と英語教育という2つの柱から地域創生を考えていくというプログラムだったと思います。そういった意味で、今、委員が言われたような部分で、</p>

	<p>学校が取り組んでいる部分が、このペーパー上、なかなか見えにくかったんじゃないかと思いますが、補足がありましたらお願いします。</p> <p>中身については、確かに委員が言われるように、まだ充実しておりません。基本的に今まで受験指導等を繰り返してきました。数年前からグローバル教育という部分を、受験指導に加えた形で行ってまいりました。その中の経験から英語科が提唱しておるのが、やはりどれだけ英語での本を読んだかっていうことが、基本的な英語力を形成していくということで、学校では話をしております。それに向けて、基本的にはやっぱり読書量も会話量もやっぱりまだ少ないと思います。まずは最低限のところ、量的な保証をしていこうということが第一のハードルでした。</p> <p>良いご助言をいただきました。聞かせていただいた第1のハードルを越えたところ、次のハードルをどういうふうを設定していくかが問題で、今、委員が言われた部分がどうしても越えなければいけない問題として、学校でも認識はしております。</p> <p>英語教員たちが様々なものを探してきて、生徒にチャレンジさせています。チャレンジしてはいるんですが、まだ学校としてこれがカチッといきますよというところまでのものが示せない状況です。それを第2のハードルとして今、校内でも考えているところです。生徒たちは、「あ、この時間は読むんだ。聞くんだ。」っていうことは、もう当たり前になってきています。英語に触れることが当たり前という学校文化が今、第1ハードルとして越えつつあるかなというのが現状です。</p>
<p>校長</p>	<p>ありがとうございます。ちょうど SGH も3年目ということで完成形ができます。やはり2つの柱の一つの部分だと思いますので、また、高知国際中高等学校につながっていく大きな柱の一つでもあると思います。ぜひ先ほどの委員のご助言も含めて研究していただければと思います。</p>
<p>座長</p>	<p>本当に教育委員会の関係者のサポートや校長のリーダーシップを通じて何かすごくいろんなことが進んでいると感じました。</p> <p>ICTのところについて少しだけコメントさせていただければと思っておりますが、ICTが普及しない理由や、うまく活用できない理由を私も自分でもいろいろ考えてみたのですが、一つは当然、財政面の問題があってインフラ整備が進まないというのがあるのですが、私は使い方とかコンテンツ内容に結構、課題があると思っています。それは提供側もそうですし、使う側にも課題があるかなと思っています。いろんな問題があるのですが、今日は1点だけに絞りたいと思います。そもそもICTを使うメリットは何だろうかと考えたときに、1つはやはりデータが取れるところだと思っています。これは紙ではできないことですね。</p> <p>もう一つは、アダプティブに対応できる。要するにクラスルームだと本当に一つのことを皆でやるという形になるのですが、それがICTを使うと一人ひとりの能力に合った、もしくは強み、弱みに合ったものが提供できる。この2つだと思うのです。だから、そこがうまくオンラインとオフラインを組み合わせると、もちろんオンラインだけで全て完結するというわけにいかないと思</p>

座長	<p>いますので、そこをうまくやった方がいいと思っております。</p> <p>絞ってデータのとこだけでお話をすると、例えば、英単語学習をやるときに、先生がまず問題をつくって、生徒が答えを紙に手で書きます。それを先生が採点しますということを多分、やられていると思うのですが、それは準備時間や採点時間を含め、先生方も時間が相当取られているのではないかと思っております。多分そのようなことを ICT 活用すれば、データでも取れるし、先生の問題作成や採点の時間も省ける。教員皆さんの労働時間短縮になる。その削減された時間を使って、先生方が本来やりたいクラスルームでのアクティビティ等によりフォーカスをしていけるような使い方が、オンラインとオフラインのうまい組み合わせだと思っております。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>それでは、時間も押し迫っております。</p> <p>資料3の方を現在、国際バカロレアに向けての進捗状況ということで、今年度の方向性というような資料になろうかと思えます。高知国際中高等学校の方からよろしく願いいたします。</p>
----	--

【高知国際中学校・高等学校の取組について】

○国際バカロレアについて説明・協議

高知国際中学校・教諭	<p>この7月から高知国際中学校ですと、名乗れるようになりました。お陰様で少しずつ4月の開校に向けて準備が進んでいるところです。どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>開校を1年後に控えて、この4月、教育委員会に、関わるメンバーが終結をしまして、方向性を確認いたしました。29年度の当初計画のところをご覧ください。大きく取組を4点挙げています。この4つの枠組みの中で、皆で協力し合って最高の日を迎えようと確認したところです。今日の発表はそれぞれ4つについて、取組状況と今後の方向性についてご助言をいただきたいところについてお話させていただきます。</p> <p>まず取組としての4つは、4月の中学校開校に向けての具体的な準備、ハード面、ソフト面です。そして2つ目が学校の核となる授業の研究、MYP、DPを通したMYPからの研究ということです。そして3つ目が候補校・認定校申請、具体的な申請準備になります。そして4点目がどうしても素養として必要となる英語力、これを高知県の課題でもありますので、これをどう強化していくかという研究です。</p> <p>まず、計画のところにあります1点目、開校に向けての準備ですけれども、1点は県民、県立高校、県立学校ですので、県民の皆さんになぜこの教育を今、この学校に取り入れていくのかというご理解もいただかなければいけません。広報活動というのをまず挙げております。このグローバル教育のシンポジウムはもちろんのこと、学校説明会、体験セミナー、そして今お配りさせていただきましたパンフレット。そしてホームページなどもこのあとに公開をしていくところです。</p> <p>言葉が抜けておりますけれども、最初にあります、7月、10月</p>
------------	--

実施予定なのは学校説明会。7月は22日に行います。受付をし始めて今日で1週間ですけども、今朝の段階で222名の方からお申し込みをいただいているようです。そして小学6年生、5年生を対象にした体験セミナーというものを開催しております。毎回、多数のご応募をいただいております。そして教員自身がIBについて勉強していくワークショップ、これを今年8月高知県で開催をする予定です。そして中学生理解というところでは、小学生の理解、中学生を理解したうえで、MYPを進めていくというところで、その勉強会もしています。

2点目、取組の2の「MYP、DPの研究」のところでは、ユニットプランナーを作成し、それを実際に使ってみるということや、それを皆で研究するという時間を設けております。また東京学芸大学附属国際中等教育学校に長期、また短期で教員を派遣させていただき、研修もしております。

3点目が候補校・認定校申請。これは助言をいただきながら進めております。

英語教育の評価については、先ほど、副校長からお話がありました。英語ネイティブが4月から早速、単独で授業していくことにもなりますので、彼らがIB自体を理解し、実践していける場をつくりました。あと連携先の中学校や教育センターの指導主事の方に助言をいただきながら、相談しながら進めていくということです。

具体的に真ん中の取組状況のところをご覧ください。最初に「IBと学校の理念の一致を軸に各規約、カリキュラム、行事などを今、検討している」というふうに書いてあります。鍵となるのは、「IBと学校の理念の一致」というところです。どうであれば主体的な学びと言えるのかとか、ATL一つ一つとりましても、価値観が人を受け入れるのはどういうことなのかということ言葉を、文字面だけではなくて、実際にどうやって学校の中にそれを組み込んでいくかということを常に確認しながら準備をしています。高知県の一つのモデル校として、IBを取り入れるという決断をしたわけですので、モデル校としての役割って何なのかということ、絶えず考えながらやっていかねばと思っています。学校説明会、体験セミナーの参加状況などは、そちらにありますのでご覧ください。

そして4月からは高知西高校で敷地をともにしていくわけですので、西高の生徒や教職員と共通理解を得ながら、この1年を過ごしていくところを大事にしています。セミナーの成果物などを廊下に掲示することによって、西高の生徒たちが足を止め、「ああ、すごいね。小学生、こんなこと書くの」と言いながら見てくれています。子どもたちが広報官になるというのを今年すごく実感をしています。また、保護者の方からも、「うちの子が今の学校であんな姿は見たことなかった。手を挙げたこともあまりない子なのに、今日は自分から声を出していた」というような声を具体的にいただくことが、私たちのまた力にもなっています。

ワークショップに関しましては、高知南中高等学校さんのご協力で8月、高知県で行うことができます。MYPの全教科、そして先ほどお話がありましたTOK、これがMYPでも自分たちの根っこになる部分だと痛感しておりますので、できるだけ多くの教職員がこのTOKも学べるよう、TOKの開講も計画しております。先日、

すべての講座が開講可能になった、人数を超えたという報告がありました。そうすることで、高知西高校、高知国際中高、高知南中高だけではなくて、高知県の教員、全国の教員が TOK を学ぶ場ができて、それが広がっていくといいな、考える力というのをどう養うかという勉強ができるといいなと思っています。

また、中学生理解に関しましては、高知大学の先生のご助言をいただきながら、やっております。そして、高知南中学校さんに度々、お邪魔をさせていただいているんですけども、1年生対象の合宿に同行しました。あと授業参観や具体的に理科の授業を、IB を実践してきた教員が、南中学校さんで実践をさせていただくということで、お話を進めさせていただいております。

2つ目の授業の研究のところですが、今、中学1年生のすべてにユニットプランナーが完成し、東京の派遣教員はそれを使って実際に授業をして、教材をつかって、そして子どもたちの反応によって改善をするということになっております。私たちとは週1回スカイプで会議をし、どのような探究の問いが良いのかということなど、さまざまな情報交換をしております。また、そういった時間があるからできることが、学校が開校してできなくなってしまうので、バディー制を教職員の中にしき、教科を越えても教員同士がお互いチェックし合える環境をつくっていかうということで、仕組みをつくっております。そのチェック項目が、先ほどお話のあった、どういう問いかけを子どもたちにしたかとか、教員はスタートストロングできたかとかいうようなところなど細やかなチェック項目が入っております。

南中学校さんでは、探究型授業のミーティングにも理科の教員が参加させていただいたりしております。また、授業改善事業の協議などにもお邪魔させていただき、現在の中学生の、高知の中学校の状況や、中学生の発達段階を勉強させていただいております。

今年から東京の国際中等教育学校へ2年間または1年間の長期研修をさせていただいている教員が7名おります。また、先日6月に私も行かせていただきました理科、英語、社会は1週間×年間3回ですけれども、国際中等さんの方でずっと授業を見させていただき、放課後や試験の状況なども拝見させていただく機会を得ています。

また、道徳や外国語教育など、次期学習指導要領の改訂もございいますので、そういったところも勉強し、一条校としての条件を満たしていきたいと思っています。

3つ目、申請の手順などについては、これも定期的にご助言をいただき、対応も確認させていただきながら進めております。ペーパーを仕上げることは簡単なんですけれども、それを言葉だけのものにしないということを、それはどういうことなのかという勉強会なども同時にしております。

英語のところでは、小中校の学びの接続ということを大事に、高知県でずっと培ってきた小学校の外国語教育を受け継ぎながら、それをどう IB の MYP に乗せて伸ばしていくことができるのかっていうことを勉強しております。先日も久礼小中学校の授業を見に行かせていただいたりもしました。また、IB の MYP の最終ゴールの一つとして、パーソナルプロジェクト、個人研究というのがあるんですけども、これを子どもたちが英語でもひるまずに

調べ、考え、発信してみようという気持ちになるように、双方の一つの時間を英語でも行うようにして、中1では調べることができる力、興味を深める力、そしてこまめにレポートを書いていくというトレーニングもさせたいと思っております。

右端の取り組みのところをご覧ください。一番上に書いています、県の教育をリードするモデル校として私たちはどうあるべきなのか、何が県立の、公立のIB校のスタンダードなのかというところが、日々悩んでいるところです。

それから訪問のときに、IBOの方から私たちだけではなくて教育委員会や管理職、教職員、図書館司書や事務職員にもインタビューがあるというふうに聞いています。保護者の皆さんにもインタビューがあるんだということをお聞きしています。どのようにそのIBの良さ、メリットなどを伝えていけばいいのかという、その伝え方のところでも今、苦戦をしておりますが、今年度中にそれを端的にまとめるということの一つのミッションとしてしています。それができると、複数の組織間で今、この開校に向けて準備をしていますけれども、ミッションの共有もできるのかなと思っています。

また、私たちのミッションの達成水準って何なのかっていうところですが、国公立に何人通すということは一つの目安ですが、それを掲げるだけではなくて、どうなれば県立のIB校と言えるのかというところを示すことが重要だと思っています。私たちの中では、グローバルな文脈、それからATLで振り返るということ、そして何よりもルーブリックを活用した評価のところかなと思っています。それを高知県のほかの学校でも伝えていくことが一つの重要なミッションではないかなと、私たちは今、考えています。

2番では、今、もう少し力を注ぎたいなと思っているのが、ディプロマを見通したMYPの研究というところです。先進校の視察をさせていただいても、やはりずっと繰り返し、概念理解をMYPから積み重ねてきたからこそ、ディプロマでこれに対応できるんだとか、生涯学び続ける学習者としての力がつくのかなということを実感するようになりました。IBのPYPからの4つの輪がよく示されますけれども、あれはそれぞれ独立したものではなくて、重なり合っているんだなということなども実感するようになりました。

3つ目の申請準備のところは割愛させていただきます。

4点目の英語の学習のところでは、先進校である札幌の開成さんと、それから国際中等さんを今年度になって行かせていただき、英語の授業を見ました。共通していることは2つあります。母語を習得するのと同じ環境っていうのを徹底してつくっているというところです。間違いをいちいち訂正しない場面を設けて、やりとりを止めない。やりとりに集中する時間を徹してつくっているということ。もちろん、それ以外の場面では正しさを求めるということはやりますけれども、「徹している」というところが見習うべきところだなと。「ぶれない」ということなんだなというのを、2校を視察させていただいて感じました。

具体的に言うと、未修得の言葉がある、習っていない文法がある、だから使わない、ではなくて、日本語でも使うように、英語でもそれは使う。そして、まだスタートしたばかりの英語学習者

だからといって、ゆっくりのスピードばかりで話さない。ほとんどネイティブのスピードで話をする。日本語と同じように、それを助けるように視覚的に、聴覚的に補助をするというようなことをきめ細やかに行いながら、子どもたちが母語を学ぶ環境と同じように、浸してあげているというところかなと思いました。また、外してはならないのは、オールイングリッシュとよく言われますけれども、IBでは概念の理解ということを大事にするわけですので、その深い話、思考を深めるときには日本語も使う、そこもきちんとぶれずにするというところも見習うべきポイントでした。

ISSさんの方ではお聞きしてないですけど、札幌開成さんでは、この3年が終わり、英語嫌いが一人もいない状況ができていているというふうに伺っています。それらすべてを支えるのは、ループリックだなということを知りました。子どもたちが先ほどからお話あるように、何が、どれくらい、どのようにできればいいのかということの日頃の授業の中から、ループリックを常に手元に置いて、先生と話しながら、友達とやり取りをしながら、「今日はこうだったな。今日はこれじゃあ3だな」ということをしながら、日々、評価する力を自分の中に育てていっている。だから、教員は試験の直前のビデオのレッスンであっても、子どもたちの会話の間違いの修正をしていませんでした。ICレコーダーに録音させて、ループリックがあるから子どもたち、十分に授業の中で正確性の練習などもして、自分で直していきますよと伺いました。ループリックがすべてを支えているということを見てきました。

そして、保護者もやはり不安に思われる、どうしても数値で示してほしいという保護者さんもいるようですので、保護者にもその評価力をつける場をつくっていくということが大切だなと思いました。東京インターで学ばせていただいたように、保護者に対するワークショップなども、そういう評価体験などを入れて、年間、2カ月に1回は少なくともやっていきたいなというふうに思っているところです。

大変長くなりました。質問させていただきたいところは、公立のIB校としてのスタンダードというものをどう考えていったらいいのかなというところです。

座長

ありがとうございました。

今のご説明でほぼ、そのIB教育、国際バカロレア導入に向けては、かなり課題も認識しながら進めているということはお理解いただけたと思います。ただ、スピード感、あるいは時間軸との関係の中、あるいは養成という点では、まだまだ短い時間の中でやらなければならないことはたくさんあるといったところではないかと思えます。そういった点で、先ほど、話がありましたけれども、公立のIB校としてのスタンダードを示す。果たして公立のIB校とはどういったものを基本に置くべきなのかという、この1点について少しご意見をいただければと思います。よろしく願います。

委員

ありがとうございました。モデル校のことに関してなんですけれども、何と言っても世界に誇れる日本の基礎学力、そして特別活動などで培われる先生方のご努力によっての日本人の民度の高さ、これにIB教育が入ってきて、新日本型の新しい教育体制が生

まれるということは、本当に大きく期待だなど思っているところ
です。なおかつ、その母国語で経済格差なく、教育格差、経済格
差を教育格差にしないという高知のこの試みは、日本のみならず、
世界に誇れることなのではないかと思っております。

実を言いますと、私は先週、韓国から取材を受けたんです。そ
の韓国が「日本はどうして母国語でやれて、無料で教育を受けら
れることに成功したのか」と聞かれました。私が言わせていただ
いたのが、「札幌は開拓やねん」と。「高知は坂本龍馬や」と言わ
せていただきました。もしかしたら、記事になってしまうかもしれ
ませんが、日本はすごいと思います。

韓国は日本のムーブメントに注目しています。日本がどのよう
に進んでいくのか注目しています。韓国の方はこのムーブメント
を市民運動として起こしたいと話していました。初めて西洋語で
はない日本語で、小学校と中学校で日本語で教えることが推奨さ
れ、高知という場所で、地方都市で、この試みができるというの
は、何としてでも坂本龍馬に恥じないように成功していただかな
ければならないという気持ちです。ですから、これは本当に皆さ
ん方の背中にかかっていますので、成功させていただき、「これが
日本の力だぞ」ということを世界に向かって発信していただきた
いというのが、私の熱い気持ちでございます。

座長

ありがとうございました。委員の言葉にすべてが集約されたの
ではないかと思えます。先生、それでよろしいでしょうか。基本
的に今、やられていることはもう正しいんだ。そういう中で、い
かに平成 30 年度の 4 月に向けて、30 年度 4 月のみならず、6 年
後を見据えた形で、どういった形で進めていくのか、今、まさに
試行錯誤されていると思えます。

英語力強化の研究ということに関して、どうでしょうか。その
辺で少し何か助言をしていただけないでしょうか。

委員

非常に分かりやすく、充実した内容の報告で素晴らしかったと
思います。はっきり方向性が分かり、先ほどのモデル校としての
役割に関する使命感とか、そういうのは非常に大事だと思うし、
それが役割だと思います。余り過度に意識せずに、今、持っている
問題意識を IB の仕組みを使って、これまでの日本にない、学校
をつくるということにまい進していただければ、自然といい実践
には人が集まってくるし、関心を持ってくると思うので、ぜひ今
の取組を懸命になって進めていただきたいなということをお思いま
した。

英語教育についての視察の報告、非常に興味深く聞かせていた
だきました。特にその中で思ったのが、先生とか学校が子どもた
ちに持つべき expectations の高さだと思います。期待というか。
県内の全員ではないですけど、中高の先生と話していて、よく出
てくるのが、「うちの子にはこれできない」と。「ここまでしかで
できない」と。そういう制限を先生の判断でもってつけていると。
もっと可能性があるのに、実際やってみたらどんどん伸びるん
です。なのに、自分の判断の中だけで、ここまでしかできないので、
ここでとどめようということがあるので、それに対して、「ここま
でできるんじゃないか」という高い expectations を持って子ども
たちに伝え、それに対して、子どもたちが主体的に取り組んで

<p>高知国際 中学校・ 教諭</p>	<p>いく。そしたら、どんどん伸びていくわけですよね。学校とか先生が生徒が伸びるのを制限するプロップにならないように、高い expectations を共有していけるようにしてもらいたいなと思います。</p>
<p>委員</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>本当に先生方が毎日、非常に大変っていうか、充実したお仕事をされているなっていうふうに思いましたので、今、先生がおっしゃいましたように、やはり expectation を高く持つ、そしてすべての先生が同じくらいそういう気持ちを持つっていうのがとても大事で、そうすると学校全体が、その学校の中にいるだけでも子どもたちが「みんな、期待されているんだな」という使命感を持つと思います。生徒が使命感を持ってやっっていけば、とても素晴らしい取り組みになると思います。非常にうらやましいなと思いつながら、神奈川も頑張ってもらいたいなと思っています。お互いに競争しながら、頑張ればよいと思っています。ありがとうございます。</p>
<p>高知国際 中学校・ 教諭</p>	<p>ありがとうございます。</p>
<p>座長</p>	<p>ありがとうございました。そしたら、ちょうど時間の枠内で収まりそうでございますけれども、残り9カ月の取組が非常に次のステップへつながる一歩だと思いますので、ぜひまた、この高知国際中高、高知西高、そして高知南中高、県教委、一体となって、この取り組みについてはサポート体制をしっかりとやっていただければと思います。</p> <p>それでは、予定の協議内容については以上で終わらせていただきたいと思つています。それでは事務局にお返しをさせていただきます。</p>

【閉会】

<p>事務局</p>	<p>座長、会議理進行をありがとうございました。</p> <p>それでは、閉会に移ります。閉会にあたりまして、高知県教育委員会事務局 高等学校課 課長補佐がご挨拶申し上げます。</p>
<p>高等学校 課長補佐</p>	<p>失礼します。高知県教育委員会事務局 高等学校課 課長補佐でございます。閉会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。</p> <p>本日は長時間にわたり、ご協議いただきまして、どうもありがとうございました。本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、道義的思考や判断力、表現力を身に付けるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来、グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としておりま</p>

事務局	<p>す。県教育委員会では、本日発表の取り組みを充実、発展させていくことで、継続的なグローバル人材の育成につながるというふうに考えております。委員の皆様には、多くのご指導、ご助言、ご示唆をいただき本当にありがとうございました。お陰様でクリアすべき課題が明確になるとともに、その課題の解決に向けた方向性を見い出すことができたというふうに思っております。</p> <p>最後になりますが、ご参会の皆様、またご多用中にもかかわらずご指導賜りました委員の皆様にお礼を申し上げまして、簡単ではございますが閉会の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。</p> <p>では、以上をもちまして、第1回グローバル教育推進委員会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。</p>
-----	---